

保育内容（表現）にみる「美しさ」とは何か

——学生の授業実践記録から——

古根川 円¹、今村 方子²

要 旨

幼稚園教育要領の5領域のひとつ「表現」に示された三つのねらいに対応する授業風景から、現在の大学生の感じ方、捉え方を分析した。また、大学生が感じる美しさと幼稚園教育要領が示す「美しさ」について検討した。授業風景では耳を澄ませて聴き、音の採取を行った。次に音を視覚化し、最後に想像力を働かせ音作品を創作する活動を行った。感覚をつかいイメージする三つの活動が、教育要領の示すねらいとどのように関連しているか考察し、大学生の捉えた環境の中に潜む「美しさ」と幼稚園教育要領「表現」における「美しさ」との関係について一考した。

キーワード：美しさ、感覚、イメージ、表現

はじめに

平成20年に改訂された幼稚園教育要領は全体を通して、幼児期の教育が人格形成の基礎であり、生きる力の基礎を培うことを謳っている。そして幼児の主体性や環境をとおして行う教育の意義・特質についても触れている。筆者らは将来、保育現場に立つ学生に、幼稚園教育要領の基本的な考え方を学び、考え、そして総合的に保育を展開していくための知識・技術・判断力を身につけて欲しいと願い授業を行っている。本授業では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」5領域の中の「表現」を扱う。本稿では子ども未来学科1年生を対象にした授業、「保育内容（表現）」の授業実践風景を紹介し、現在の学生の感覚や価値観、幼稚園教育要領のねらい・内容に記されている「美しさ」について一考する。

1. 気付いたり感じたりする活動

1.1 サウンドマップをつくろう

幼児は毎日の生活の中で身近な周囲の環境と関わりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見付け、美しさや優しさなどを感じ、心を動かすことで感性の芽を育てている。つまり、

1 梅光学院大学子ども学部非常勤講師

2 梅光学院大学子ども学部教授

生活や遊びの中で出会う様々なことを五感で受け止め、イメージを豊かにしている。本授業では、気付いたり感じたりする活動として、聴覚に限定し学内を探検して美しい音を集めて来る活動を行った。

対象学生 1年生 35名

教示 20分間で美しいと感じる音を集め、ばいこうおとまっぷを作りなさい。

順路は地図を元に説明し統一した

準備物 ばいこうおとまっぷ、筆記用具

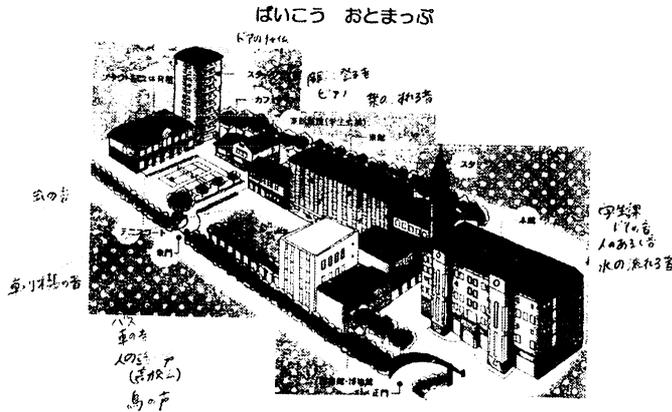


Fig. 1 サウンドマップの一例

20分間で採取した音は平均14個（最高28個、最低3個）であった。採取した音を分類するとTable 1のようになった。梅光学院大学が正面は道路に面し、裏側は比較の木立が多い立地条件ということもあり、車の出す機械音と木の葉の音などの自然音が多くみられた。教示では「美しいと感じる音」と限定したが、

結果は身の周りのあらゆる音が採取された。学生の動向では、当初は美しい音として鳥のさえずりなどの「高い音」を記載しようとしていたが、最終的には耳に入ってきたあらゆる音の記述がなされている。戸外での活動が彼らの五感を開放し、心をとらえる音の記述となったように

Table 1 採取した音の分類

I 自然音	II 人間の音		III 音と社会		IV 機械音	
自然	人体の音	音声	家庭のサウンドスケープ	音楽	内燃機関	機械道具
木の葉の音	革靴の音	女子高生の笑い声	食器を洗う音	ピアノの音	バイクのエンジン音	草刈り機の音
風の音	階段を上る足音	学生の話声	トイレの音	オルガンの音	車の走る音	エレベーターの音
小鳥のさえずり	小石を踏む音	講義の声	ドアの開く音		バスの音	自動販売機の音
草の音	足音	おばちゃんの声			トラックのバックする音	換気扇の音
猫の鳴き声	落ち葉を踏む音	口笛			自転車のベルの音	
鳩のはばたき	階段を下る足音					
虫の声						
水の流れる音						
無音						
葉っぱが風に舞う音						
旗が風になびく音						

注：分類項目は R.M. シューファー「世界の調律」による

見受ける。

1.2 サウンドエデュケーション

サウンドマップをつくる活動は、カナダの作曲家マリー・シェーファーが提唱したサウンドスケープ (soundscape: 音の風景) を基にしている。サウンドスケープとはサウンド (音 sound) とスケープ (風景 scape) を組み合わせた造語で、自然の音、都市の喧騒、楽音のような人工的な音など我々を取り巻く全ての音をひとつの風景として捉えるとともに、人々と音とがどのような関係であるかを探る概念である。サウンドスケープは地域、文化、時代と共に様々に変化していく。都市化が進むにつれ騒音問題が起り、生活の便利さと比例して様々な電子音が氾濫する。マリーはこの問題をネガティブに受け止めるだけでは何も生まれてこないと感じ、世界のサウンドスケープを改善するために聴き方を学ぶことを提案している。『サウンドエデュケーション』は聴くという行為を再認識するための100の課題集であり、「耳掃除 (イヤークリーニング) の課題集」と言われる。課題集の1は「聞こえた音をすべて紙に書き出しなさい。聞こえた音のリストをつくろう。」から始まる。そして「リストはひとりひとり皆違うはず。なぜなら聴くという行為はとても個人的なことだから。答えはすべて正しい。」と記されている。

マリーの言葉をふまえて改めてサウンドマップを眺めてみると、学生たちが採取した音は一般的には騒音に分類されるような音も数多く含まれている。しかし、普段はやり過ぎしてしまう音に耳を傾ける行為により、その音に新しい発見や、面白さを見出しリストアップしたと考えられる。そこで、学生に「美しい音とはどんな音か」と問いかけをした。学生の回答を Table 2 に示す。発見のある音、何気ない音、その時の気持ちに合う音、聴こえるものすべて、そして人それぞれ違うなど、学生一人ひとりが考え学んでいる姿が見られる。また、美しいと感じる音の中に「無音」が含まれていることも、日本人ならではの感性の現れであり興味深い。マリーの言う「聴くという行為はとても個人的」なことであるという概念を再認識できる。自らが「聴く」という行為を、環境が生み出したと言える。

Table 2 「美しい音とは」の回答

心が安らぐ	飽きない	聞き苦しくない
癒される	発見のある	何気ない
心地よい	小さくて高い	人それぞれ違う
やさしい	静かな	明るい気分になる
興味のある	落ち着いた	その時の気持ちにあう
耳を澄ますと聴こえる	自然界の	いいなと思う
生活感のある	日常的な	場所や気分にあう
心に響く	季節感のある	聴こえるもの全て

1.3 領域「表現」との関連

幼稚園教育要領のねらい(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつに関連

する活動であり、内容(1)の生活の中で様々な音、色、形、手触りに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。活動とも言える。サウンドマップの活動は音に特化していたが、音=聴覚、色=視覚、形=空間認識、手触り=触角と五感を使い刺激することを重要視している。内容に挙げられなかった味覚や嗅覚なども様々な生活体験のなかで気づき、感じるよう配慮したい。

2. イメージを豊かにする活動

2.1 図形楽譜をつくらう

<手順>

- サウンドマップで採取した音の中から、自分のお気に入りの音を4つ選ぶ
- お気に入りの音を擬音語で表してみよう
- お気に入りの音を図形、絵で表してみよう

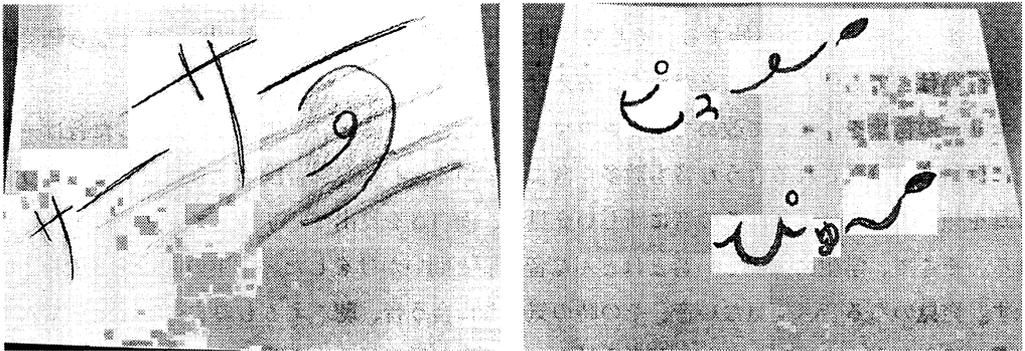


Fig.2 木の葉の擬音



Fig.3 風の音の擬音

2.2 音の視覚化

Fig.2とFig.3はそれぞれ木の葉の音、風の音を擬音化したものである。音を音韻的な文字として表現したものが擬音語、擬態語である。日本のマンガ文化で多用されているこの手法は、日本人の音に対する感性を表しているものと言える。マンガの中で視覚化された音をマンガコラ

ムニストの夏目房之介は擬音語・擬態語・擬情語を包括するオノマトペの範疇に収まりきらないと「音喩」と名付けている。聴覚で捉えた自然の音を擬音化し視覚的に表現することで、音は聴覚から感性のフィルターを通り作者のイメージを伝えている。さらに、見た者にも受け手側のイメージを喚起することのできる表現方法のひとつといえる。

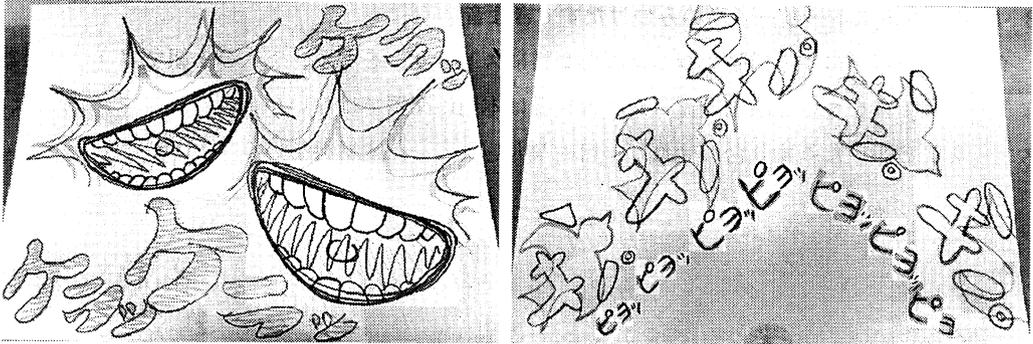


Fig. 4 図形と擬音のコラボレーション

Fig. 4は小鳥と笑っているおばさんを描いたものだ。小鳥やおばさんを描写的に描くのではなく、小鳥の輪郭や口を図形化することで見る側のイメージを喚起している一例である。小鳥の羽ばたきの音も図形化したことで飛んでいる様子が想像できる。左の口の絵は絵だけでも元気な笑い声が聞こえてきそうだが、擬音を書き加えたことで明るい笑い声が聞こえてきそうな印象を受ける。

2.3 領域「表現」との関連

このように音を聴き、感じ、イメージしたことを表現する活動は、ねらい(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむや、内容(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。活動といえる。日常生活の中で五感を通して感じたこと、体

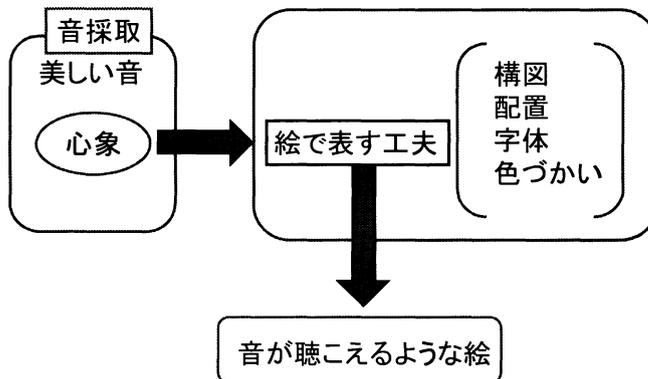


Fig. 5 音の視覚化を図る

験したことを通して具体的イメージを蓄積していく。この具体的イメージの蓄積が、想像力、創造力の源となる。

3. 伝え合う楽しさを味わう

3.1 サウンドストーリー「私のみつけたすてきな音」

イメージを豊かにする活動で行った図形楽譜にストーリーを考え、二人ひと組でガラクタ楽器などの音具で音をつける活動を行った。音具とは本当の楽器ではないが金製ボールやピン、缶、スプーンなど叩いたりすり合わせたり、自由な発想で音を出す材料をいう。



Fig. 6 うちわを紙袋に入れ音を出してみる



Fig. 7 様々な音具を手に試してみる

3.2 音のイメージを再現

これまでの活動では実際の音に耳を澄まして聴き、擬音化・図形化を行った。ここでの活動は、実際の音をイメージしながら再現する、つまり自分のイメージを創造して表現する活動になる。限られた時間内の活動・発表であったが、学生たちは自ら表現する工夫を行っていた。例え



Fig. 8 サウンドストーリーの発表

ば、音を出してから絵を見せる場合と絵を見せてから音を出す、クイズ形式で音を聴かせる、音を出す人は隠れて出し聴衆のイメージを誘発する (Fig. 8) など指導者が指示していない創意工夫が見られた。発表者と聴衆は聴覚や視覚を通じて、今ここにはない風の音や小鳥のさえずりのイメージを共有したといえる。

今後の課題として、音を発する際いかにすれば効果音から音楽になりうるのかと考えさせられた。サウンドスケープの考え方によると、「多種多様な音をすくい上げ、どのような音がどのような場合に「音楽」となり「騒音」となるのかその

本質を改めて問い直す」とある。今後の課題として検討したい。

3.3 領域「表現」との関連

図形楽譜にストーリーと音をつけ発表する活動は、ねらい(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ活動といえる。幼児も日常の中で聴いたり、見たり、つくったり、かいたりするなどの楽しみの中から、内面に蓄えられた様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み立てながら、想像の世界を楽しんでいる。そして、感じとったものを友達や教師と共有し、表現し合うことで豊かな感性を養い、自ら創造的活動を行うことに繋がっていく。また、内容(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。にも関連する活動である。学生たちも様々な音具を風の音などに見立て、自由な表現活動を展開した。イメージを豊かにするための道具や素材の準備、指導者が整える環境構成の大切さを感じた。

4. 美しさについて

1.1 サウンドマップをつくろうの項でも触れたが、「美しい」とは一見何気ない表現、何気ない表記だが解釈は様々考えられる。幼稚園教育要領の感性と表現に関する領域「表現」において「美しい」と記された箇所が2箇所ある。

ねらい(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。

内容(2) 生活の中で美しいものや心動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

(下線は筆者)

「美しい」を広辞苑で引くと①愛らしい。かわいい②ア：形・色・声などが快く、このましい。きれいである。イ：行動や心がけが立派で、心をうつ。③いさぎよい。さっぱりしていて余計なものがない。となっている。どれも大人の目線で考えれば納得いくものである。しかし、幼児が感じる「美しい」とはこれだけなのであろうか。ねらいのいろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつを自然に読むと、音楽や芸術の美しさを指しているのではと勘違いをし兼ねない。内容(2)で生活の中で、と明記してあることから幼児が日常生活の中で出会う様々な事柄を指していることがわかる。ここでの「美しい」は日常生活で出会う喜びや悲しみ、驚き、目に入るものすべて、つまりに心が動くこと全てを指しているといえる。大学生は様々な音を採用する活動を通じて、発見のある音、何気ない音、その時の気持ちに合う音、聴こえるものすべて、そして人それぞれ違うなど(Table 2)大学生の視点で「美しさ」を考察した。

美しいと感じ、気付き、心動かすことができる感性、感受性には人間が生まれながらにもっている感覚と成長とともに鋭敏になっていく感覚や感性、そして学ぶことによって培われていく感性や感受性があると考えられる。幼稚園教育要領には幼児期の教育が、生涯にわたる人格形成の基礎であること、生活や遊びの中で生きる力の基礎を培うことが明記してある。

五感で感じられる、豊かな感性の芽を育みたい。そして、平成23年より完全施行となった小

学校学習指導要領音楽科に新しく加わった〔共通事項〕に、全学年にわたって記載されている「美しさを感じとること」に繋がって欲しいと願う。

おわりに

本稿では幼稚園教育要領をふまえ、保育内容「表現」の授業実践から美しさについて一考した。「美しさ」はよく耳にし、頻繁に使う言葉だが、保育の内容やねらいを示す言葉としては、奥が深く難しい表現であった。このように幼稚園教育要領には「楽しむ」「楽しさを味わう」「豊かな感性」など心情に関わる表現が多く、豊かな感性を育むための具体的方法がわかりにくいと感じる。生まれ落ちた赤ちゃん自身は昔も今も変わらないが、赤ちゃんから幼児、そして子どもへと成長する環境は大きく変化している。将来保育者として幼児に深く関わる現大学生も、幼児を取り巻く環境の一要素となりうる。大学生のもつ感性、文化性が幼児に反映されることを考えると保育者養成の現場は責任重大である。幼児と保育者をつなぐ我々は、改めて幼稚園教育要領が掲げる人格形成の理念を心に留め保育者養成に努めたい。

参考文献

1. 今川恭子, 宇佐美明子, 志民一成編著 (2005) 子どもの表現を見る、育てる 文化書房博文社
2. 広辞苑第六版 (2008) 岩波書店
3. 鳥越けい子 (1997) サウンドスケープ [その思想と実践] 鹿島出版会
4. 松本晴子 (2010) 「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」にみる表現 (音楽) の考察 宮城学院女子大学発達科学研究 vol.10
5. 三森桂子編著 (2010) 新・保育内容シリーズ5 音楽表現 一藝社
6. 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
7. 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説音楽編 教育芸術社
8. R.M.シェーファー著, 鳥越けい子他訳 (2006) 世界の調律 平凡社
9. R.M.シェーファー, 今田匡彦 (1996) 音さがしの本リトル・サウンド・エデュケーション 春秋社